

比較ことわざ学の可能性¹⁾

鄭 芝 淑

1. 比較ことわざ学

ことわざに関する研究は大きく分けると、ことわざを採集してその意味や用法を記述し分類する「ことわざ収集」(Paremiography)と、ことわざを様々な側面から考察する「ことわざ研究」(Paremiology)に区分される。Mieder (2004)によれば、どちらも長い歴史があり、現在も活発な活動によって多くの成果が生み出されている。ことわざ研究は、ことわざのどの面に着目し、どのような目的を持って、ことわざにどのように迫るかによって、さらに様々な分野に分かれる。ことわざは様々な顔を持つ非常に多面的な存在である。ことわざは民間伝承の一種であり、定型句として分類される、多くは口調が良い簡潔な言語表現である。ことわざには、機知に富みユーモアのセンスのある誰かに作り出され、聞く人の共感を得て次第に常套句として定着して行く過程で形や意味・用法を変化させ、あるものは役目を終えて消え去るという歴史がある。ことわざには、庶民の知恵や価値観が込められており、人を慰めたり励ましたり導いたり、あるいは諭したり戒めたりからかったり非難したりするのに用いられる道具である。ことわざはまた、言語教育、特に外国語教育の重要な素材でもある。したがって、ことわざは民俗学、言語学、歴史学(言語史)、文献学、社会学、心理学、言語教育など様々な観点から研究がなされてきた。ことわざは明らかに学際的な研究の対象であった。

ことわざはまた比較の対象にもなってきた。異なる文化のことわざを比べ合わせて、その類似点や相違点を明らかにし、それに基づいてそれぞれの文化の特質や国民性、民族性の違いを論じることは古くから行われてきたし、現在もことわざ研究の大きな部分を占めている。韓国の国会図書館のホームページ (<http://www.nanet.go.kr>)によれば、2007年6月の時点で1974年以降に発表されたことわざ関係の学位論文194点が登録されているが、そのうちの59点(30.4%)は韓国語のことわざと英語、日本語、中国語、フランス語、ドイツ語など他の言語のことわざとの比較を扱ったものである。少なくとも数量的には、異なる文化のことわざの比較研究はことわざ研究の一分野として成立しているようである。しかも、上に挙げたことわざ研究の他の下位分野が、既存の学問分野に基づいてその一部として位置付けられるのに対して、比較研究は、ことわざの収集や分類と同様、ことわざ学独自の分野であると考えられる。

しかし、水準の点からすると比較研究がことわざ研究の中心的な位置を占めていると

は言えないのが実情である。韓国の国会図書館に登録されていることわざ比較関係の学位論文59点のうち、博士学位論文はわずかに3点に過ぎず、残りはすべて修士学位論文である。また、同図書館に登録されている学術雑誌論文についてみても、ことわざ比較関係の論文はかなり少ない。ある言語のことわざについて考察するのに他の言語のことわざに言及することはよく行われているが、異なる文化のことわざの比較を本格的に取り上げた先行研究はほとんどないのが実情である。このことから、ことわざ比較は卒業論文や修士論文の手軽なテーマとして取り上げられるけれども、それ以上の水準にまで発展させることが困難なようである。この事情は、日本においてもあまり大きく異ならないのではないと思われる。異なる文化のことわざ比較は、ことわざ学独自の問題であり、多くの関心を引き付けてきたテーマであるにも拘わらず、本格的な研究成果があまり生み出されてこなかった理由が何であるのか、「比較ことわざ学」²⁾はその問題の検討から始めなければならない。

本稿の表題である「比較ことわざ学の可能性」は二通りの意味に解釈できる。一つは、「比較ことわざ学」という学術的研究分野が成立するかという基本的・理論的な問題である。もう一つは、「比較ことわざ学」が何を明らかにできるか、ことわざ研究にどのように貢献できるかという実質的な問題である。この二つの観点から検討することしよう。

2. 比較ことわざ学は成立するか

ある研究分野が成立していればそれには必ず名称が付いている。しかし、その逆は必ずしも成り立たない。学問分野の名称があるからと言って、その分野が学術的研究分野として確立されていることにはならない。「大阪学」とか「できごとロジー」のような学問名称風のタイトルを付けた本が出版されているが、そのような学術的研究分野があるわけではない。「比較ことわざ学」や「比較ことわざ研究」にもそれに近い名称先行的な側面があるのではないと思われる。

一般に、ある研究分野が成立するためには、①研究の対象、②方法論、③研究の目的・意義などいくつかの要件を満たさなければならない。このような要件の中で最も重要なのが明確な方法論の確立することである。その理由は、明確な方法論がなければ、学術研究に要求される論理的必然性に基づく説得力が保証されないからである。学術研究も出発点は個人的な関心であるけれども、研究の結果は個人的な趣味や関心にとどまっていることはできない。論文や報告、学会発表などを通じて、他の研究者に伝達し受け入れられ共有されることを目的としなければならない。そのためには、分析や考察、記述は恣意性を排除した客観的なものでなければならず、実証あるいは反証することが可能な形になっていなければならない。これを保証するために明確な方法論が必要なのであ

る。

先に述べた「民俗学的事わざ研究」「言語学的事わざ研究」「歴史的・文献学的事わざ研究」のような分野の場合には、それぞれ、母体である既存の学術研究分野の方法論をそのまま用いればよい。実際、これまでそのように行われてきた。そのために、これらの分野では学術的に評価される多くの研究成果を生み出してきた。ところが、ことわざ研究独自のテーマであることわざ比較に関しては、独自の方法論を作り出さなければならない。それなのに、その努力が充分になされてこなかった。それが「比較ことわざ学」が学術的研究分野として成熟していない根本的理由ではないかと考えられる。

「比較ことわざ学」が明確な方法論を欠いているという点、意外に思われるかもしれない。学術研究分野の名称には、「臨床心理学」「電波天文学」「対照言語学」「マクロ経済学」「実験音声学」などのように、方法論と研究対象を組み合わせた形式のものが多く、「比較ことわざ学」もその一つである。異なる文化のことわざを（対象）互いに比較することによって（方法論）その共通点や相違点を明らかにする（目的）ということであるから、十分に研究分野としての成立要件を満たしていると思われるかもしれない。しかし、単に「比較する」というだけでは方法論の要件を満たすのには不十分である。どのように比較するのかを明確にしなければならない。

人間は日常的に比較という作業を行っている。人や物を認識したり、変化に気付いたり、ある物から別な物を連想したりするのは、比較の結果である。このような日常的な比較を無意識的、反射的、直感的に行っているため、比較することが難しいことであるとは考えない。しかし、学術的な比較は、日常的な比較とは異なり、意識的、計画的に行われるものである。比較の結果が学術的意味と説得力を持つためには、細心の注意が必要である。ことわざ比較においては、このことがあまり重要視されてこなかったように思われる。

ことわざ比較と言っても、個別のことわざを比較する場合、例えば日本のことわざ「壁に耳あり障子に目あり」とそれに対応する韓国のことわざ「낮말은 새가 듣고 밤말은 쥐가 듣는다」（昼の話は鳥が聞き夜の話は鼠が聞く）とを比較するような場合には、方法論は大して問題にはならない。それぞれのことわざの形式、韻律、比喩、意味、用法、使用頻度などをできるだけ詳しく調べ、基本的にはそれを並べて比べ合わせるだけでよい。個別的事わざ比較はそのような記述に留まらざるを得ない。それぞれの文化のことわざに関する豊富な知識に基づけば、単なる並列的記述以上の記述をすることができるが、それは記述の方法論であって、比較・分析の方法論ではない。また、個別的事わざ比較の結果を蓄積すれば二言語対照ことわざ辞典ができあがる。そのような辞典を編纂することも比較ことわざ研究の仕事の一つである。しかし、それはことわざ比較の資料として重要なものであるけれども、比較ことわざ研究の中心的課題であるとは言えない。

比較ことわざ学の中心的課題は、異なる文化のことわざの総体的比較である。個別的ではなく総体的に比較しようとするとき、方法論が重要になってくる。比較の方法論とは、どのように比較するかその手順のことであるが、その手順の第一段階として、どのようなことわざを比較するか、つまり比較ことわざ群を画定しなければならない。ことわざの総体的比較といっても、ある文化のことわざすべてを対象にすることはできない。特定の文化のことわざの数はもちろん無限ではなく有限であるが、そのすべてを漏れなく把握することはできない。韓国のことわざ辞典で最も規模が多いものは、5万件以上のことわざを収録している。しかし、それが韓国のことわざのすべてであるとは言えない。このような膨大な数のことわざの中から、比較に適したものを客観的な手順に従って選ばなければならない。比較ことわざ群の画定こそ比較ことわざ学の成立を左右する最も重要な課題である。もし、客観的な手順による比較ことわざ群の画定なしに比較の作業が行われたとすれば、どのようなことになるであろうか。そうすると、あらかじめ予想される共通点や相違点の証明に都合のいい例だけを拾い集めて分析し結果を出すという循環論に陥ることになる。そのような恣意的な「方法論」から説得力のある結論を導くことはできないであろう。

従来のことわざ比較の試みにおいて、比較ことわざ群の画定の問題が無視されていたわけではない。本格的な比較研究においては、ほとんど例外なく、比較の対象とすることわざをどのように選ぶかという問題から議論が始められている。しかし、決してその議論は充分ではない。大抵の場合、どれか権威・定評のあることわざ辞典あるいはことわざ集を一、二冊選び、そこに収録されていることわざを比較の対象とするという方法を取っている。これまで、このような画定方法の妥当性を疑う者はなく、ほとんど無批判的に受け入れられてきた。ところが、よく考えてみると、このような方法では比較に適切なことわざ群を得ることができないのである。なぜなら権威・定評のあることわざ辞典は収録件数があまりにも多すぎるからである。韓国のことわざの場合、ことわざ群画定のためによく利用されるのは李基文編『俗談辞典』（一潮閣）であるが、そこには7,000件以上のことわざが収録されている。一般の韓国人が知っていることわざの件数は500件以下であると考えられるから、『俗談辞典』に収められたことわざの大半はほとんどの韓国人が知らないことわざである。そのようなことわざが韓国のことわざの特質を分析する資料とすることは明らかに不適切である。母語話者が分析する場合には直感的なふるいにかけて取捨選択するのであろうが、そうすればことわざ群画定の意味がなくなってしまう。非母語話者が分析する場合には直感的な取捨選択さえできない。

比較の対象とされることわざ群は単に客観的に規定されるというだけでなく、「代表性」と「同等性」の二つの条件を満たさなければならない。「代表性」とは、比較ことわざ群はそれぞれの言語文化のことわざを代表するものでなければならないというこ

とである。母語話者のほとんど誰も知らないようなものがそこに含まれていてはならない。「代表性」の条件を満たさないことわざ群を資料とする分析の結果は、その言語文化のことわざの特質を明らかにしたとは言えない。一方、「同等性」とは、比較されることわざ群は規模においても質的な面においても同等なものでなければならないということである。この条件を満たさないことわざ群を比較しても、意味のある分析結果を導き出すことはできない。この二つの条件を満たすことわざ群を画定するための客観的な手順が得られない限り、「比較ことわざ学」を学術研究分野として確立することはできない。従来取られてきた権威あることわざ辞典を利用して画定されることわざ群は、二つの条件を満たしているとは言い難い。そのために、分析結果に説得力を持たせることができなかったのである。

では、「代表性」と「同等性」の基準を共に満たすことわざ群をどのように画定するのか。鄭芝淑(2007)が提唱した方法は次のようなものである。ある言語文化のことわざの総体は、その文化に属するほとんど誰もが知っていてよく使われる中核的なことわざからごくわずかな人にしか知られずほとんど使われることもない周辺的なことわざに至るまで、様々に「重み」の異なることわざが同心円スペクトル上に分布しているものと捉えることができる。このように捉えられたことわざの総体を「ことわざスペクトル」(Paremiological Spectrum)と呼ぶ。ここで「重み」というのは、ことわざの認知度(どれだけ知られているか)、使用頻度(どれほど使われるか)、定着度(どれほどの歴史があるか)などによって総合的に規定される概念である。比較のためのことわざ群の画定は、比較される二つのことわざスペクトルの中心から同じ大きさの部分を取り取ることによって得るものと考え。そのように画定されたことわざ群は、「代表性」(ことわざスペクトルの中心部分)と「同等性」(同じ大きさの部分)の二つの条件を満たすことになる。しかし、ことわざスペクトルはアナログ的な実体でありどこにも明確な切れ目はない。そのため、任意の切り取りができるようにデジタル的な実体に変換しなければならない。その方法としては、ことわざ辞典調査が最も適していると判断した。日本と韓国で過去約20年間に出版された収録件数3,000件以下の規模のことわざ辞典・ことわざ集それぞれ数十点を資料として、ことわざの収録度数を調査した。それぞれのことわざの収録度数をそのことわざの「重み」の指数とみなすことによって、スペクトルのデジタル化を図った。それによって得られることわざリストを「ことわざスペクトルリスト」、略して「PSリスト」と呼ぶ。こうして、日本と韓国のことわざについて、それぞれ、43段階と28段階の度数区分を持つPSリストが得られた。PSリストを作成するための資料としたことわざ辞典の各々は、権威のあるものもないもの、どのことわざを収録するかについて編纂者の主観が色濃く反映されているから、比較ことわざ群画定のための単独の根拠にすることはできない。しかし、主観を集めて平均化すれ

ば、「客観」が生まれるのである。

PS リストの度数上位のものから必要に応じて一定件数のことわざを切り取れば、「代表性」の条件を満たすことわざ群が得られる。PS リストは同じ手順で作成されたものであるから、度数上位の同じ件数を切り取れば「同等性」の条件も満たすことができる。このようにして、恣意性の入らない比較ことわざ群の画定が可能になることによって、「比較ことわざ学」成立のための最低条件が確保されることが考えられる。

ただし、ことわざ辞典調査による PS リストを作成するという方法は、十分な数のことわざ辞典やことわざ集が入手できない場合には不可能である。日本と韓国のことわざに関しては、たまたま、十分な数のことわざ辞典が出版されていたから可能であったが、大多数の言語のことわざに関しては、その条件は満たされないと思われる。そこで、鄭芝淑（2007）は、ことわざ辞典調査の本質を生かしたアンケート式調査によって任意の言語のことわざに関して「標準 PS リスト」を作成する方法を構想した。これによって「比較ことわざ学」はどの言語文化のことわざについても可能な学術研究分野となることができる。

3. 比較ことわざ学は何ができるか

「比較ことわざ学の可能性」の第二の解釈に移ろう。比較ことわざ学が成立したとして一体何ができるのか。比較ことわざ学の目標は、異なる言語のことわざの相違点と共通点を明らかにし、それによってそれぞれのことわざの特質をより鮮明にすることである。では、ことわざのどのような特質を明らかにできるのであろうか。これについては、二つの場合に分けて考えてみたい。一つは、従来のことわざ比較の試みの成果を再検討し、その延長線上で比較の作業を進めることである。前に述べたように、異なる文化のことわざを比較することは古くからことわざ研究者の興味を引いてきた課題であり、多くの分析結果が発表されてきた。それらは学術的分析・記述とは認めがたいのであるが、決して間違っているというわけではない。厳密な比較の方法に基づいていないために、説得力を欠いているのに過ぎない。おそらく、その多くは正しかったのではないと思われる。直感的に妥当であると判断されたからこそ、あまり厳しく批判もされてこなかったのだと考えられる。新しい比較ことわざ学の枠組みを用いて、このような過去の研究成果を再検討することによりその妥当性を再評価することが、まず第一に手がけるべき課題である。比較ことわざ学の確立は、従来研究成果をすべて否定するものではあり得ない。むしろ、その成果を土台として行われるものである。従来の比較の試みは様々な観点からなされてきた。それらの観点は新しい方法論においてもそのまま利用できる。鄭芝淑（2007）では、従来注目されてきたいくつかの特徴に関して、日本と韓国のことわざを PS リストの利用により比較した。それは、新しい方法論的枠組みが有効である

かどうか試験的に試みたものに過ぎず、分析も表面的な段階にとどまっている。しかし、そのような分析の試みを深めまた広げることにより比較ことわざ学の内容は豊富になるはずである。比較の視点と素材はすでに十分に用意されているからである。

このような比較の試みが、過去の研究成果の再評価以上の結果を生むことも予想される。従来の研究においては、厳密な方法論がないために、比較の観点（特質）の分析も厳密になされてこなかった面がある。しかし、厳密な方法論を掲げる比較ことわざ学では、観点の分析も厳密にならざるを得ない。PS リストに基づいて比較ことわざ群を画定すると、数量的比較が可能になるのであるが、それには観点を範疇化することが前提になる。鄭芝淑（2007）が取り上げた観点は、語彙（動物語彙、身体語彙）、文種（平叙文、疑問文、命令文、条件文）、文形式（体言止め、古風な文体）など比較的範疇化が容易なものだけであった。ところが、ことわざの特質には範疇化が困難なものがある。例えば、ことわざの重要な定義特徴である簡潔性（長さ）、韻律（リズム）、比喩性などは、簡単に範疇化できるものではない。簡潔性をどのように数値化・範疇化するかは一つの言語に関してであればそれほど難しいことではないであろうが、異なる言語の比較の場合には、共通の長さの尺度が必要になる。共通の尺度に基づく範疇化をしなければ比較はできない。しかし、その尺度を何に求めるかは非常に難しい問題である。数量的比較を可能にするために、このような範疇化の検討を積み重ねていくことが、副産物として観点（特徴）の明確化につながるのではないかと期待される。

比較ことわざ学の二つ目の課題は、従来の方法ではできなかったことを可能にすることである。厳密な手順によって画定されることわざ群を比較の対象とすることによって、これまでなし得なかった何ができるようになるかを示すことである。そのような例として稿者は二つのことを考えている。一つは、ことわざの認知度の比較であり、もう一つはことわざの文化依存性の問題である。それぞれ以下に独立の節を立てて述べることにする。

4. ことわざの認知度の比較

ことわざが次第に使われなくなっている、特に若い世代においてその傾向が強い、ということが直感的に感じられ言われている。ことわざの認知度を実証的に確かめることはことわざ学の重要な課題の一つである。同一の言語文化内で世代別あるいは性別の観点からことわざの認知度を比較するという試みはこれまでいくつかなされているが、そのうち丸田ほか（1993a, b）や松岡（1986）の調査は綿密に計画された調査であり結果の分析も精密で、それぞれ直感的な予測を裏付ける結果を導き出すのに成功している。しかし、これらの調査には共通の難点がある。いずれもアンケート調査法を用いているのであるが、認知度の調査対象としたことわざは30～40件と比較的少数である。アン

ケートの回答時間の制約のためにこの程度の規模にしなければならなかったのであろうと考えられる。なぜそれらのことわざを調査対象に選んだかについても、客観的な根拠は何も述べられていない。調査に適當であると予想されることわざが選ばれているに過ぎない。そのように選ばれたこの程度の数のことわざを対象とする調査の結果から確実にわかることは、対象としたことわざの認知度だけである。ことわざの総体的な認知度についてはその結果から推測するしかないのであるが、その信頼性はかなり低い。ことわざごとに認知度のばらつきがかなりあることから判断すると、別なことわざ群を対象として調査をした場合にまったく別な結果が出る可能性が非常に大きいからである。総体的認知度に対する推測の精度を上げるために考えられる最も単純な方法は、調査対象とすることわざの件数を、例えば10倍くらいに増やすことである。しかし、そうすると回答時間が非常に長くなってしまい十分な数の回答者を得ることができなくなってしまう。

一方、異なる文化のことわざの総体的認知度を比較することは、従来はまったく不可能であった。適当に選ばれた二組のことわざ群の同等性を保証する根拠がない限り、それらの認知度を調査しても比較することができないからである。

ところが、PSリストを利用して調査対象とすることわざを選定すれば、これらの問題点を回避することができる。鄭芝淑(2005a, 2007)は次のような手順で日本と韓国のことわざの認知度の調査を行った。まず、日本と韓国のことわざのPSリストで度数上位1,500件程度のことわざを次の5つのレベルに区分する。

レベル1・・・最上位の100件程度

レベル2・・・次の上位300件程度

レベル3・・・次の上位300件程度

レベル4・・・次の上位400件程度

レベル5・・・次の上位500件程度

次に、各レベルのことわざから調査形式に適するものを5個ずつ計25個選ぶ。その際、選択に恣意性が入らないように配慮する。調査形式は、それぞれのことわざの前半部だけを示し後半部を補充させる形式とする。回答を集計し正答数の平均を認知度の指数とみなす。この調査を日本と韓国でそれぞれ500名を対象に実施した。

このような形式の調査は比較的簡単に行えるが、調査結果はかなりの信頼性が期待できる。中学校や高校に調査を依頼する場合回答時間は15～20分程度が限度であるので、調査することわざを25件にしたが、30分程度の回答時間であれば50件以上でも可能である。また、後半部補充式ではなく一語補充式の回答形式を取れば20分で100件を

対象にすることもできる。調査項目が多ければ多いほど総体的認知度に対する推測の精度は高くなるけれども、25 件程度でも十分な信頼性が得られるように設計されている。PS リストの度数をいくつかのレベルに区分して、基本的、中核的なことわざからやや特殊なものまで偏りがないように調査項目が選ばれているので、少数のことわざであってもことわざ総体を代表しているとみなすことができ、また、有意的な差が出やすいように選択されている。さらに、重要なことは、同じ手順で作成された日本と韓国の PS リストに基づいて、やはり、同じ手順で調査項目が選定されているので、日本と韓国の調査結果は互いに比較可能であることが保証されるのである。つまり、調査項目は「代表性」と「同等性」の条件を満たしているために比較可能なのである。

調査の結果、日本でも韓国でもことわざの認知度に性差はないこと、年齢層別では上位層になるほど認知度が高くなる傾向が顕著に認められること、高齢者層（50 歳以上）では認知度の日韓差はほとんどないが、若年層では日本よりも韓国のほうが認知度が高いことなどが明らかになった。ただ、調査項目の選択に一部不都合のあることが分析の段階で明らかになり補正分析を行わなければならなかったため、結論は断定的なものではなく、再調査の必要がある。再調査の結果がどのようなものになるかわからないが、調査手順に誤りがない限り、結果に対する信頼性は高いと考えられる。

5. ことわざの文化依存性

比較ことわざ学は、ことわざ学の最も根本的な問題である「ことわざとは何か」という問題とも深く係わる。ことわざの定義は、ことわざ研究者を最も悩ませてきた問題の一つであり、これまで様々な研究者により様々な定義がなされてきた。その中で最も簡潔で要を得ているものの一つが Mieder（1985：119）による次の定義である。

A proverb is a short, generally known sentence of the folk which contains wisdom, truth, morals, and traditional views in a metaphorical, fixed and memorable form and which is handed down from generation to generation. （ことわざは、短いよく知られた民衆的な文であり、知恵、真理、道徳、伝統的思考を比喩的、固定的で記憶しやすい形に込めており、世代から世代へと受け継がれていくものである。）

この定義は、英語の母語話者を対象とするアンケート調査の結果を整理して得られたものであるから、厳密に言えば英語のことわざの定義である。しかし、このようなことわざの定義に関する議論は、特定の言語文化のことわざを念頭においてなされているわけではない。おそらくどの言語文化のことわざにも適用できるものとして議論されるの

が普通である。「どの文化にもことわざと呼ばれる定型表現がある」とよく言われるが、そのこと自体は間違っていない。しかし、「ことわざ」「俗談 (속담)」「諺語」「proverb」などと呼ばれる定型表現が同じものであると考えてもいいであろうか。つまり、ことわざを文化の違いと関係なく定義できるであろうか。比較ことわざ学は一応それらが同じものであるとみなして比較の作業を行うけれども、それは便宜的な仮定に過ぎない。そのように仮定しないと「同等性」の条件を満たす比較ができないからである。

ことわざが特定の文化の中で作られ使われてきたものである以上、文化依存的な性質があると考えの方が自然である。その形式や意味内容だけではなく、使い方や使用頻度においても、さらには定義においても違いがあったとしても不思議ではない。それらを明らかにするのが比較ことわざ学の仕事である。ことわざの定義に関する文化依存性の問題も比較ことわざ学の重要な課題である。もちろん、その場合にも明確な方法論が必要であることは言うまでもない。

ことわざの定義の文化依存性を考える簡単な方法として、各言語の辞書でことわざがどのように定義されているか、ことわざの辞書的定義を資料として用いることが考えられる。鄭芝淑 (2007) は、日本語、韓国語、英語の辞書でことわざがどのように定義されているかを調査した。調査に用いた辞典は、日本語辞書 16 点、韓国語辞書 15 点、英語辞書 18 点で、調査時に利用可能であったもののすべてであり取捨選択はしていない。定義の例をそれぞれ 3 点ずつ次に示す。

《日本語辞書》

- ・昔からいいならわしたことばで、多くは訓戒・風刺などを含んだ一般にいい伝えられる短句。 — 新村出編『言林』
- ・古くから世間に伝えられている教訓や風刺を含む文句 — 守随憲治監修『国語辞典』旺文社
- ・古くから人々に言いならわされたことば。教訓・諷刺などの意を寓した短句や秀句。「蒔かぬ種ははえぬ」の類。 — 新村出編『広辞苑』(第五版)

《韓国語辞書》

- ・세상에 흔히 돌아다니는 알기 쉬운 격언. (世の中によく言い習わされている分かりやすい格言。) — 동아출판사편 (東亜出版社編)『동아 新콘사이스 국어사전 (東亜新コンサイス国語辞典)』

- ・ 옛적부터 민간에 전하여 오는 알기 쉬운 격언 또는 잠언 (箴言). (昔から民間に伝えられてきた分かりやすい格言または箴言。) — 金敏珠他編 『금성판국어대사전 (金星版国語大辞典)』
- ・ 민간에 전해 오는 쉬운 격언. 세언. 속설. 속언. 언속. 이어. 이언. (民間に伝えられてきた易しい格言. 世諺. 俗説. 俗諺. 言俗. 俚語. 俚諺。) — 한글학회편 (ハングル学会編) 『우리말 큰 사전 (国語大辞典)』

《英語辞書》

- ・ A short pithy saying in common and recognized use; a concise sentence, often metaphorical or alliterative in form, held to express some general truth. — Lesley Brown (1993) (ed.) *The New Shorter Oxford English Dictionary*. Clarendon press. Oxford.
- ・ a short popular saying, long current, embodying some familiar truth or useful thought in expressive language. — Clarence L. Barnhart (1951) *The American College Dictionary*. Random House.
- ・ a short pithy saying in general use, held to embody a general truth. — R. E. Allen (1990) *The Concise Oxford Diction of Current English*. Clarendon Press.

このような辞書的定義に含まれる定義特徴を抽出し、それぞれの出現度数を一覧にしたのが次の表である。

表：ことわざの辞書的定義の分析

(分析資料：日本語辞書 16 点、韓国語辞書 15 点、英語辞書 18 点)

特 徴	日本語	韓国語	英 語	特 徴	日本語	韓国語	英 語
簡 潔 性	14	7	18	口 調	3	0	0
平 易 さ	0	5	0	韻 律	1	0	2
大 衆 性	16	14	15	形 式	1	0	3
陳 腐 さ	0	0	1	興 趣	2	0	0
伝 統 性	16	10	5	社 会 常 識	1	0	3
認 知 度	0	0	4	知 恵	3	1	3
匿 名 性	0	1	1	真 理	1	0	12
比 喻 性	0	0	2	風 刺	12	5	0
な ぞ	0	0	3	教 訓	14	6	6

これを見ると、「大衆性」のような特徴は、ほとんどの言語の定義にも現れているけれども、いくつかの特徴に関しては言語ごとにかなりの偏りがあることがわかる。例えば、「簡潔性」は日本語と英語のほとんどの辞書の定義に現れるのに対して、韓国語の辞書では半数にしか見られない。「伝統性」は日本語のすべての辞書に現れるが、英語の辞書では5点にしか見らない。韓国語辞書の特徴としては、「平易さ」を含む定義が5件あるけれども、日本語や英語の辞書にこの特徴は現れない。「風刺」や「教訓」という要素は日本語の辞書の多くに見られるけれども、その他の言語の辞書にはあまり現れない。「真理」は英語の辞書の多くに現れるが、日本や韓国の辞書にはほとんど見られない。このような分布の偏りは、「ことわざとは何であるか」という点に関して、文化依存的な面があることを強く示唆していると考えられる。

ただし、これはあくまでもことわざの辞書の定義の分析によるものであって、ことわざ自体の特徴分析ではない。したがって、ことわざの文化依存的性質を示唆しているけれども、その違いの実質を現しているとみなすことはできない。それは、ことわざの極めて重要な定義特徴であると考えられる「比喩性」「口調」「韻律」などに触れている定義がほとんどないことから明らかである。

ことわざの文化依存性の実質に迫るにはことわざ自体の特徴分析によらなければならない。それはまさに比較ことわざ学の中心的課題である。その課題を追求した後に「ことわざとは何か」に対する答えが明らかになる。ことわざ研究に先立ってことわざを定義しておく必要があると考えるのが普通であるが、厳密に言えばことわざ研究の結果としてことわざが定義されるのである。それは一見不合理なように見えるがそうではない。ことわざの定義の性質上そのようなならざるを得ない。ことわざの定義は、上に挙げた学術的定義や辞書の定義に見られるように、ことわざの諸特徴と無関係になされるのではなく、それらの諸特徴の束としてなされる。それらの諸特徴がそれぞれの文化のことわざスペクトルにおいてどのように活用されているかは、ことわざ研究の目標でありその結果である。したがって、ことわざ研究に先立って提示されることわざの「定義」は、分析結果を先取りしたおおよその目安としての役割を果たすものであるに過ぎない。このような先取りので便宜的な「定義」はことわざの場合だけに限られるわけではない。多くの学術研究分野で取られている方法である。

PS リストを作成するとき、このような先取りの定義によって取捨選択は行わなかった。資料としたことわざ辞典に登録されている項目のすべてをことわざとして扱った。その中には金言、名言、格言、四字成句、慣用句などことわざに隣接すると考えられる範疇の定型句も多く含まれているが、それらを一切排除しなかった。ことわざとこれらの範疇の区別する客観的な基準が得られなかったことがその主な理由であるが、ことわざの範疇を外れるものはおそらく PS リストの上位に位置づけられることにはならない

であろうと予測したことにもよる。最初は意識しなかったことであるが、振り返って考えてみると、ことわざ辞典に収められているものがことわざである、というのは考えられる唯一の独立の定義ではないかとも思われる。「ことわざ」辞典という題が付いている限り、そこに収められた項目はすべて、編纂者がことわざとみなしているものであるか、あるいは一般にことわざとして受け取られていると編纂者が判断しているものである、と考えるのが自然である。ことわざは民衆のものであると言われる。だとすれば、ことわざ研究の素材となることわざは、民衆がことわざであると判断しているものとまず定義するのが当然であろう。ことわざ研究者が下す厳密な定義は、ことわざ研究の結果として得られるものである。これに関して思い起こされるのが、しばしば引用される Taylor (1931 : 3) の次の定義である。

The definition of a proverb is too difficult to repay the undertaking; and should we fortunately combine in a single definition all the essential elements and give each the proper emphasis, we should not even then have a touchstone. An incommunicable quality tells us this sentence is proverbial and that one is not. Hence no definition will enable us to identify positively a sentence as proverbial. (ことわざの定義は難しすぎて苦勞しがいのない仕事である；そのすべての本質的要素の一つの定義の中に組み合わせ、それぞれを相応に強調したとしても、試金石にはならない。言葉で表せない性質がこれはことわざでありあれはことわざではないと告げるのである。したがって、どのような定義もある文がまぎれもなくことわざであると判定してはくれないだろう。)

Mieder (2004 : 3) もこれを受けて「一般大衆は学術的なこだわりや複雑さにとらわれることなく、ことわざが何を含むかをよく知っている」(people in general, not bothered by academic concerns and intricacies, have a good idea of what a proverb encompasses) と述べているのであるが、これは、一般に解釈されているように、学術的定義が不十分であることを示すものではないと考えられる。両者は互いに異質なものである。学術的定義はことわざ研究に基づく厳密で明確なものでなければならない、後者は直感的で曖昧さが許される。特定の定型句をことわざとみなすかみなさないかについては個人差があり、同一個人においても一定不変である必要もない。中心的な部分は共通しているが、周辺的な部分においては一致しないのが当然である。それをあえて学術的定義の中に取り込もうとすることは、まさに「苦勞しがいのない仕事」である。

繰り返すが、比較ことわざ学の目標は異なる文化のことわざの共通点と相違点を明らかにすることである。「ことわざとは何か」に対する答えもその目標の中に含まれると

考えられる。PS リストに基づく比較ことわざ学は、ことわざの学術的定義を出発点としないことによって、ことわざの定義の文化依存性を明らかにする可能性を持っている。

6. ことわざ研究の活性化

上で、ある研究分野が成立するためには、①研究の対象、②方法論、③研究の目的・意義などいくつかの要件を満たさなければならないと述べたが、この他に研究する者がいるという条件が満たされなければならないことは言うまでもない。研究者の数は多ければ多いほど、研究は活性化しレベルも向上する。PS リストに基づく比較ことわざ学は、この面でも貢献が大きいと思われる。

これまでもことわざ比較の試みが数多くなされてきたといっても、他の研究分野と比べれば決して多いとは言えない。その理由は、比較のための明確な方法論がないため、興味はあっても説得力があると研究者自身が確信できるような成果に到達しにくい、ということであったと思われる。それに、比較の作業は決して楽な仕事ではない。主張を裏付ける例を選ぶことは多大な時間と労力を要する。ことわざの定義ばかりでなくことわざ比較もまた「苦勞しがいのない仕事」であったのである。しかも、従来の研究は研究成果が蓄積されない形で進められてきた。発表された研究成果に疑問があっても、分析データが発表されていないためそれを確かめることすらできず、発表された結果を信じるしかなかった。確かめたければ同じ作業を繰り返さなければならなかった。このような事情が、ことわざ比較研究の発展の大きな障害になってきたのではないと思われる。

PS リストに基づく比較ことわざ群の画定から出発する比較ことわざ学が、これらの問題点を回避するのに大きな助けになると考えられる。各文化の PS リストが与えられれば、誰でも興味さえあれば、比較ことわざ群の妥当性について神経を使う必要もなく、安心して比較の作業に着手することができる。PS リストはもちろん研究者が共有するものであり、特定の比較成果も共有できる。比較成果に疑わしい点があれば、それを比較的容易に検証することもできる。さらに、PS リストはことわざ比較以外にも効果があると考えられる。個別文化のことわざ研究においても、分析対象とすることわざ群の画定は重要な意味を持つと思われる。非母語話者が分析する場合には特に重要である。また、外国語教育の素材としてことわざを選択するにも PS リストは非常に有用であると考えられる。³⁾ したがって、PS リストに基づく比較ことわざ学は、ことわざの比較研究ばかりでなく、広くことわざ研究の活性化にもつながるのではないと思われる。

註

- 1) 本稿は、2007年9月22日に明治大学で開催された「ことわざ学会」のフォーラム『ことわざ学の可能性』で発表した内容に加筆修正したものである。
- 2) 北村（1997）は、「比較ことわざ学」の名称をことわざの歴史的研究の意味で用いている。混同を避けるため本稿の意図する分野名称として「対照ことわざ学」のような用語を用いることも検討したが、できるだけ平明な名称が望ましいのであえて「比較ことわざ学」を使うことにした。
- 3) 外国語教育と PS リストについては、鄭芝淑（2005b、2007）を参照。

引用文献

- 北村孝一（1997）「越境することわざ ―ことわざ研究の可能性と課題―」『ことわざ学入門』遊戯社、pp.1-12
- 鄭芝淑（2005a）「日本と韓国のことわざ認知度 ―ことわざスペクトル・リストに基づく調査」『多元文化』第5号、名古屋大学国際言語文化研究科国際多元文化専攻、pp.241-252
- （2005b）「韓国語能力試験問題のことわざ」『ことばの科学』第18号、名古屋大学言語文化研究会、pp.181-200
- （2006）「日本と韓国のことわざの特徴 ―暫定 PS リストに基づく分析―」『多元文化』第6号、名古屋大学国際言語文化研究科国際多元文化専攻、pp.57-68
- （2007）『日本と韓国のことわざの比較研究 ―ことわざスペクトルと比較ことわざ学―』（名古屋大学大学院国際言語文化研究科博士学位論文）
- 松岡武（1986）「「ことわざ」に関する調査結果から見た現代若者像」『山梨大学教育学部研究報告』第37号、pp.122-130
- 丸田実・福田滋美・石野博史（1993a）「第7回言語環境調査から（1）ことわざは現代人にどのように受け入れられているか」『放送研究と調査』6月号、NHK 放送文化研究所、pp.40-49
- （1993b）「第7回言語環境調査から（2）ことわざ・成句の形と意味のゆれ」『放送研究と調査』7月号、NHK 放送文化研究所、pp.34-43
- Mieder, Wolfgang（1985）Popular Views of the Proverb, *Proverbium*, 2, pp.109-143.
- （1994）Paremiological Minimum and Cultural Literacy, *Wise Words: Essays on the Proverb*. New York:Garland Publishing, pp.297-316.
- （2004）*Proverbs: A Handbook*. Greenwood Press.
- Taylor, Archer（1931）*The Proverb*. Cambridge: Harvard University Press; rpt. with an introduction and bibliography by Wolfgang Mieder. Bern: Peter Lang. 1985